

環境保全運動における推進者、一般参加者、マス・メディア間の認識の相違

杉谷 隆・山元智香子・玉井靖子

1. はじめに

1999年度卒論生・伊藤ゆう子の調査によると、全国で森林（里山）保全活動を行う市民団体は、早い例では1960年代後半から現れるが、一般には1980年代から急増する。このような活動を指す日本語の「ボランティア活動・団体」の用語は、1990年代にはメディアに定着した（『国民生活白書・平成12年版』）。一躍有名になった活動は1995年の阪神・淡路大震災の被災者支援だが、環境保全では1997年に発生した日本海石油流出事故後の海岸清掃作業が印象深い。1998年12月には、保健、医療、福祉、社会教育、まちづくり、文化、芸術、スポーツ、環境保全などの12分野の市民活動を対象として、特定非営利活動促進法が施行された。

ボランティア活動が一般化してくると、付帯的な精神的側面も注目されるようになった。金子（1992）は、ボランティアを「切実さをもって問題にかかわり、つながりをつけようと自ら動くことによって新しい価値を発見する人」と定義する。この種の自己啓発ふうの能書きは、環境分野ではとくにディープ・エコロジーにおける主眼の1つであり（たとえばドレグソン・井上共編，2001）、環境倫理学者はもちろん、社会学者の一部も関心を抱いている。また、三橋（1997）のような「森林は日本人の心のふるさと・原風景である」という類の論も多い。その関連分野として、景観計画もいま盛んに論じられている。

杉谷も、現代人が自然に関わる際の精神性（自然観）に注目しているが、それを個人レベルの啓発や倫理観や郷愁で捉える気は全くない。むしろ、行為対象である自然科学的な自然環境と、行為主体である大衆が抱く自然観との間の共通点や相違に、より興味がある。環境保全活動は、マス・メディアによる大衆意識操作（「日本人の心のふる

さと」などの美辞麗句は典型例である）のもとで、また活動推進者と一般参加者の相互の思惑のもとで、多様な考えを持つ人々によって成立しているのが現状である。杉谷は、それは環境保全が一般化した証拠かもしれないと考え、追求したいと思っている。

本稿は、東京近辺の森林保全活動と、富士山の環境保全活動について、活動者の考えかたを探ったものである。前者は一般参加者の自然や森林に対する評価に、後者は富士山の象徴性に主眼を置いた。資料は、卒業論文研究として山元が前者を、玉井が後者を調査して得た。杉谷はこれらを取捨選択して再解析し、新たに論理を構成した。したがって文責は杉谷にある。

2. 森林保全活動参加者の意識

2.1 歴史的経緯

高度経済成長期に木材の輸入関税が引き下げられて以来、周知のように日本の林業は衰退を続けている。『林業白書・平成11年版』によると、現在の日本の森林総面積は2514万ha（国有林784万ha、民有林1730万ha）ある。人工林は約1000万haで、このうち約7割が35年生以下だが、下草刈りや間伐などの保育作業は進んでいない。

一般市民による森林保全活動の先駆けは、1974年からの「草刈り十字軍」である。この活動は、富山県大山町の町有林に除草剤を空中散布するのに反対した人たちが提唱して、夏休み中の若者たちによる下草刈りを行ったのが始まりである。作業形態は請負でボランティアではないが、日当はわずかであり、むしろ自己鍛錬・自己啓発の意味合いが強い（足立原，1998）。森林保全活動には、当初はこのような取付き難さがあったことは事実である。

一方、河川水質を維持するための水源林育成活

表1 調査した森林保全活動団体

プログラム名	フォレスト21〔さがみの森〕	山と緑の協力隊
主催者	フォレスト21連絡協議会 (脚注)	特定非営利活動法人地球緑化センター
活動目標	1. 多様な動植物が生息し、多様な人が気軽に訪れる森林を造る 2. 次世代に知識や経験を継承する	1. 森林と人間を良好な関係に戻す 2. 主体的なボランティアを育てる
活動開始	1997年2月 国土緑化推進機構『緑の募金』の記念事業として創設される	1996年5月 主催者が林野庁と交渉し、最初に長野県赤沢自然休養国有用林に入る
活動場所	神奈川県津久井町所在・仙洞寺山国有用林のヒノキ伐採跡地4.5ha	2000年末時点で長野、静岡、神奈川県、千葉、埼玉、岩手県。総活動面積45.86ha
活動状況	* 1999年末までの実績 定例会を毎月2回実施 延参加人数825人 (平均20人/回) イベントとして植林・下草刈り大会、動植物観察会、木工作業会を実施 延参加人数1135人 (平均51人/回)	* 2000年10月22日までの実績 森林施業プログラムを90回実施 延参加人数3606人 (平均40人/回)
活動参加者 (公募) の属性 / * 出所注記のないデータは、主催者の実績調査資料による		
男女比	M: F = 72: 28	67: 33
年齢構成	* 下記の調査結果による 60歳代 30%, 50歳代 37% 40歳代 7%, 30歳代 11% 20歳代 15%	60歳代 12.8%, 50歳代 25.1% 40歳代 14.6%, 30歳代 16.2% 20歳代 20.3%, 未成年 11.0%
参加経験	* 下記の調査結果による 1回目 11% 2~4回目 22% 5~9回目 11% 10回以上 52% (100回以上 15%)	1回目 66.7%, 2回目 13.8% 3回目 6.1%, 4回目 13.8% 5回以上 9.7%
居住地	* 下記の調査結果による 東京都 63%, 神奈川県 33% 埼玉県 4%	* 下記の調査結果による 東京都 45%, 神奈川県 19% 埼玉県 19%, 千葉県 5% 岩手、静岡、岐阜、三重県 各3%
山元が参与観察した活動	2000.08.26開催 下草刈 (上記国有用林) 参加者65人	2000.08.19~20開催 下草刈 (箱根芦ノ湖風景林) 参加者43人
時間割は表2を参照	2000.10.14開催 定例会・下草刈 (上記国有用林) 参加者29人【意見調査実施】	2000.10.21~22開催 間伐・枝打 (富士山自然休養林) 参加者37人【意見調査実施】

注：関東東京森林管理局 (林地提供)、社団法人・国土緑化推進機構 (資金援助)、特定非営利活動法人・森づくりフォーラム (労力とアイデア提供) の3者で構成される。

動が、漁民らによって行われてきた。この原因は、上流域の開発にとまなう森林伐採だが、伐採にはブナなども家具材に利用されるようになった事情も影響している。小学校教科書にも掲載された有名な活動としては、宮城県気仙沼市の「牡蠣の森を慕う会」が、1989年から植林や講演会などを行っている (柴崎, 1996)。

いま都市民に人気があるのは、近郊林の保全事業である。旧農用林の場合は里山保全の通称で呼ばれ、子供を含む多様な参加者を見込む行事では遊びの要素も大きい (Sugitani, 2000)。本稿で対象とした活動は、作業内容は「草刈り十字軍」以来続く重労働に変わりはないが、場所の点では近

郊林保全の一般性も持っている。

2. 2 調査対象団体

調査した2つの団体を表1に示す。冒頭にはそれぞれが実施するプログラム名 (活動の愛称) を挙げた。団体名とプログラム名とは異なるものだが、区別すると煩雑で読みにくくなるので、以下では「さがみの森」、「山と緑の協力隊」と略称する。

運営上は、「さがみの森」は、表1脚注のように官民協力型の典型例である。特定非営利活動法人・森づくりフォーラムは、東京西部の森林で活

動する各種ボランティア団体が、1995年に設立したものである¹⁾。これらの団体が活動を始めた契機は、1986年3月に東京を襲った大雪による森林被害であり、林業家が森林を放置しはじめたため、危機感を感じた都市民が無償の森林作業を申し出た（真田、1998）。「さがみの森」の施業面積は狭いが活動の濃度は高い。

「山と緑の協力隊」は民間団体だが、特定非営利活動法人格を取得しており、他の任意団体よりも組織や活動はしっかりしている。各地の公有林管轄者と交渉し、その意向に沿う形で森林保育作

業を続けている。そのため、活動面積は広く、作業参加者も比較的広域から集めている。

いずれの団体も、参加者の割合は男性が7割前後と多く、中高年が主力である。参加回数でみると「さがみの森」のほうにベテランが多く、表中には示していないが、それ以前からの森林作業の経験者も多い。活動目標の点でも、文章表現は両者で異なるものの、人が森林に親近感を持つようにすることと同時に、人材育成をも掲げている。「さがみの森」では、若年層の参加を促すために、専門のグループを作る案もあるという。

表2 森林保全作業の日程

さがみの森	山と緑の協力隊（1泊2日）	
2000年10月14日	2000年10月21日	10月22日
08:30 鉄道利用者は橋本駅集合	10:30 御殿場駅集合	07:00 起床
08:35 車に分乗して施業林へ	バスで宿舎へ移動	08:00 バスで施業林へ移動
09:00 車利用者は現地集合	10:40 受付, オリエンテーション, 昼食	08:50 間伐作業開始
09:20 作業説明, 準備	11:20 バスで施業林へ移動	11:45 作業終了
10:00 下草刈り開始	12:10 作業説明, 作業班長紹介	12:00 昼食
11:45 昼食	12:30 枝打ち作業開始	12:30 自然散策ハイキング
13:00 作業開始	15:15 作業終了	13:15 閉会
14:30 作業終了, 後片づけ	17:30 宿舎に帰り夕食	13:30 宿舎へ移動
15:00 解散	18:30 営林署長の講師で学習会	15:00 解散
	20:00 解散, 班長会議, 就寝	

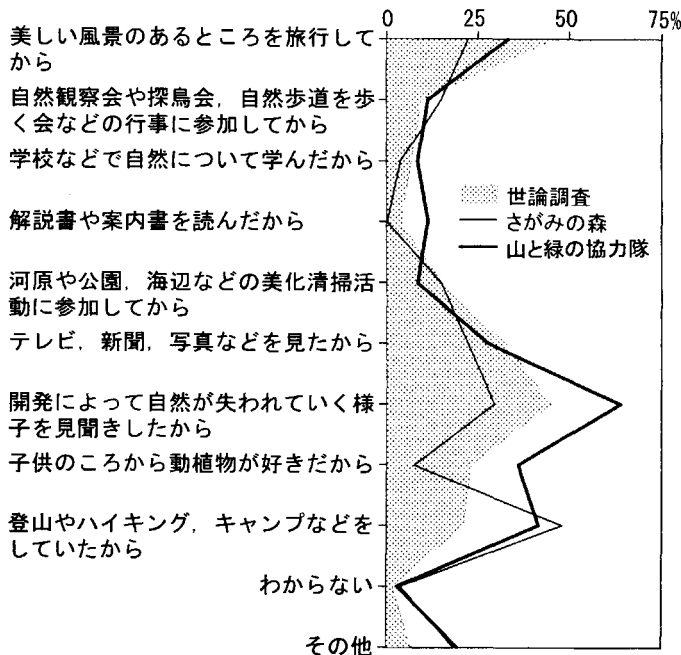


図1 自然に関心を持ったきっかけ

2. 3 自然への関心・要求

山元は、まず両団体がそれぞれ開催する2000年8月の森林作業に参加し、両事務所を聞き取り調査して様子を把握したうえで、10月の作業時(表2)に参加者への聞き取りと質問票調査を実施した。表の作業日程は、いずれも森林保全活動としては標準的なものである。

山元の調査内容は多岐にわたるが、本稿では活動参加者の自然や森林機能に対する意見を取り上げ、総理府が実施した世論調査結果と比較する。本調査でも、世論調査と同じ質問・選択肢を用意した。

まず、「自然に関心を持つようになったきっかけ」(図1)をみよう。全体的に、世論²⁾と参加者意見の多寡の位相は同じである。量的に倍近く世論よりも大きく、両団体に共通するのは、「登山」などの経験だった。一方、「自然が失われていく」と「動植物が好き」の得点は、「さがみの森」で世論よりも低く、「森と緑の協力隊」で高かった。両者を平均すれば世論なみになるので、単なるばらつきと解釈しておく。

次に、過去1年以内に山や森に行った目的を尋ねた結果を、図2に示す。ただし、「ボランティア活動」の選択肢は、参加者には当然なので除外した。両団体とも全般的に世論³⁾よりも得点が高く、目的意識や具体性が高いことを示している。とくに「景観や風景」、「森林浴」、「のんびり」などの得点が相対的に高い。世論と位相が逆転気味だった選択肢は、「スポーツ」で参加者のほうが高く、「キャンプ」や「釣り」で低かった。

2. 4 森林の機能に対する評価

参加者が森林に求める機能を、図3に示す。選択肢は世論調査⁴⁾に合わせたが、これらは俗説をも含み、かつそれを承知のうえで意図的に質問しているので、先に注記しておく。

森林の水源涵養機能は、四手井(1985)なども指摘するように、確固とした根拠があるわけではない。樹木は光合成や蒸散で水を消費するので、むしろないほうが流出量は多くなるという議論が、昔からなされてきた。玉城(1979)は、治山治水は近世の支配者の論理ではないかとすら考えてい

る。ただし、洪水緩和機能があることは確かで、樹冠の働きで降雨の直接流出が減少し、また森林土壌の降雨流出遅延効果も加わって、洪水のピーク流量は減る(太田, 1996)。ピークが小さくなれば無為に海に流出しないので、利用可能な水量は増加する。

二酸化炭素吸収機能についても、緑色植物は昼間は光合成を行うものの、夜間は同化作用で二酸化炭素の放出量が多くなる。その差が木材として蓄積するわけだが、樹木が枯死して分解すれば二酸化炭素に戻ってしまう。大気中の二酸化炭素を減らしたければ、樹木を次々に更新させ、倒した木は泥炭のように未分解のまま土中に埋める必要がある。

調査結果は、世論に近似していた。これはむしろ意外な結果であり、参加者がいま協力しているはずの「木材生産」の得点は高くはなかった。一方、根拠が危ない「水資源」や「二酸化炭素吸収」は世論よりも高目で、根拠のある「災害防止」は低目に出た。

「教育の場」という機能は、表1の主催者の目標とは裏腹に、あまり評価されなかった。また、前節では「森林浴」や「のんびり」といった目的が多かったが、この質問では「保健休養」は低いという不可思議な逆転が起きた。

3 富士山の環境保全運動における象徴性

3. 1 富士山の象徴性

富士山が「日本の象徴」とされてきたことについては、すでにくつも議論がある。霊峰としての富士山の歴史はやや古いですが、日本の象徴とされたのは明治期からの新しい現象である。

1つの議論は、志賀重昂の『日本風景論』の影響をみるものである。猪瀬(1992)は、江戸時代の藩という人々にとっての実質的空間が、国家という抽象的空間に拡大するにあたって、富士山、太陽、桜、松などがシンボル化されたと指摘する。同書の挿し絵も普及して、富士絵の構図を規定したという。さらに米地(1996)は、志賀がいう外国の山にも富士を命名していきたいという言辞に、露骨な帝国主義を読みとる。

一方、阿部(1992)は、明治期の検定教科書が富士山を象徴的に扱ったことで、児童は国体(天

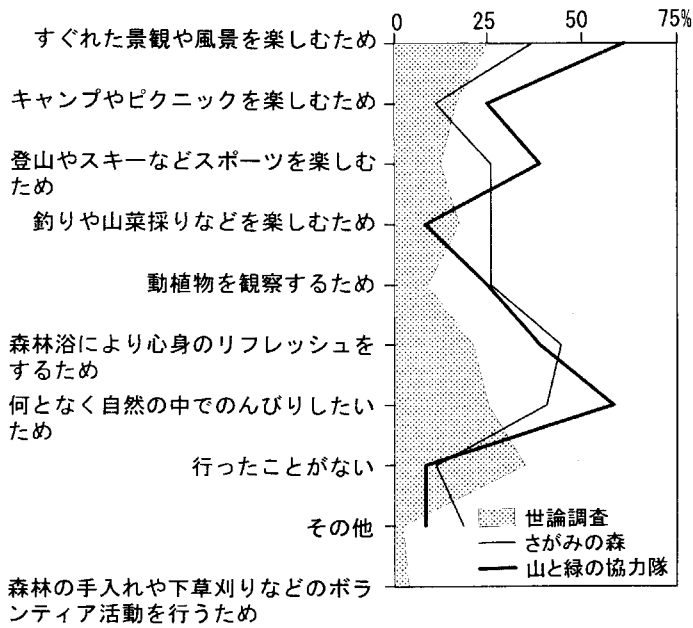


図2
山や森に行った目的

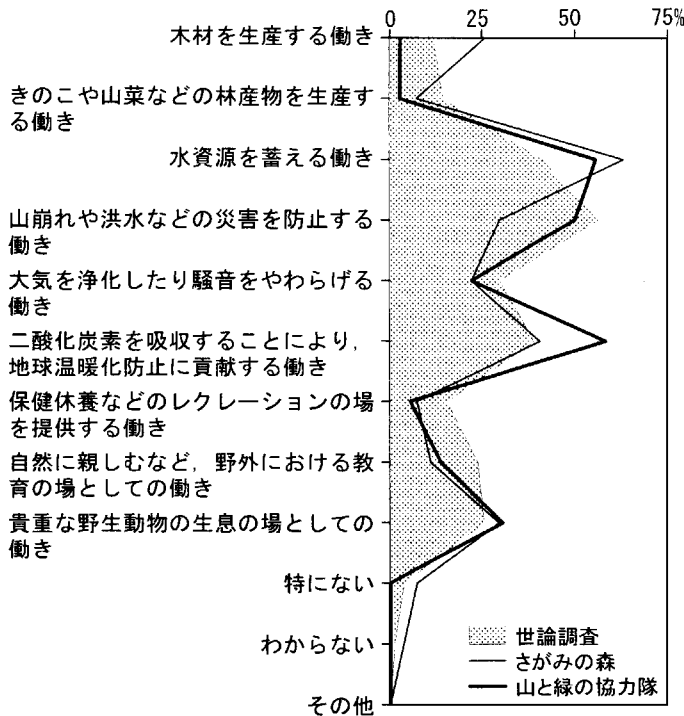


図3
森林に期待する機能

皇制)の意味を暗示されたと分析する。このような教育を通じた近代国家構築過程は、品田(2001)が国民詩集として『万葉集』が位置づけられる経緯を分析し、杉谷(2001)が地理用語「半島」の

普及について言及している。

富士山の象徴性の胡散臭さに対して、鋭い感性から拒否反応を示したのが太宰治『富嶽百景』(1939年発表)である。すでに1937年には日中戦

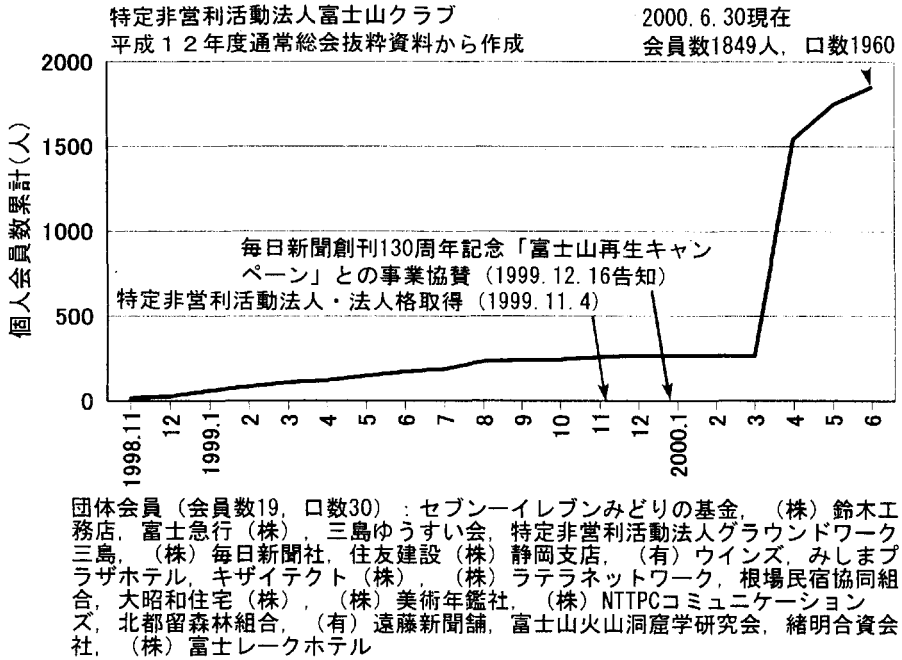


図4 富士山クラブ個人会員数の推移

争が勃発しており、暗雲たちこめる中ででのさやかな抵抗として、等身大の、時として惨めな象徴性を、太宰は求めたように思える。

3. 2 富士山クラブ

富士山とその周辺地域は、地下水枯渇、ゴルフ場・遊園地・自衛隊演習場などの造成による自然破壊、観光公害、ごみ不法投棄などの環境問題を抱えている。1994年には世界遺産に登録する運動が展開され、250万人近い署名が集まったものの、開発が進み環境対策が不備だとしてユネスコへの申請が見送られ、地元へ衝撃を与えた。

「富士山クラブ」は、まず任意団体として1998年11月に発足した。設立の趣意は、富士山の環境問題に取り組むことで、日本の環境問題解決の模範を示すことである。その母体は、1992年に富士山麓の約20の自然保護団体⁵⁾で結成した「ぐるっと富士山圏グラウンドワーク」である⁶⁾。「富士山クラブ」事務局長は、このうち2つの団体の代表を務めていた。このような市民団体間の人脈と合従連衡は、一般にかなり複雑である。

「富士山クラブ」は、1999年11月に特定非営

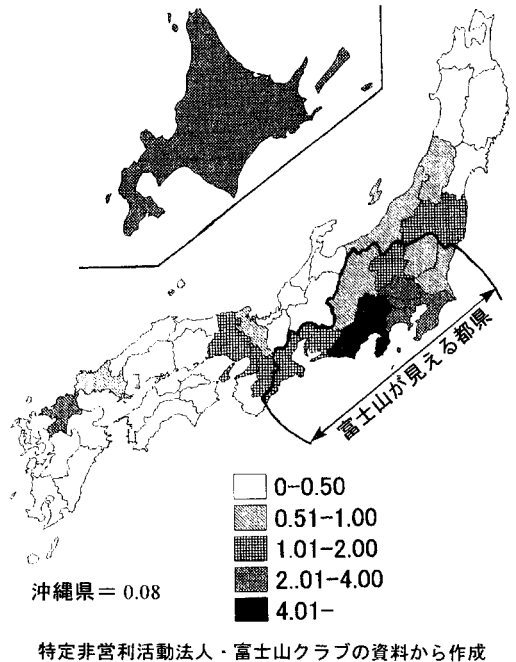


図5 富士山クラブ会員数の対人口10万人比の分布

表3 富士山クラブの財務状況

収入	1999	比率	備考	2000	比率	備考
	決算額 千円			%		
会員会費収入	40	2	個人2000円×20口	4,358	71	
寄付金収入	25	1		50	1	
助成金	8,100	332	セブンイレブンみどりの基金、大成建設、安田火災環境財団	29,667	482	セブンイレブンみどりの基金、国土緑化推進機構助成金他
事業委託金	2,000	82	富士山の森づくりプロジェクト	4,000	65	富士山環境保全支援プロジェクト助成金、ネットワーク事業
事業収入	1,415	58	森づくりツアー-2回、インストラクター養成講座	14,800	240	インストラクター養成講座、ツアー、地球学校
協賛金	100	4	すべての人の心に花を	0	0	
募金箱収入	3,427	140		900	15	
雑収入	205	8		75	1	
寄付金・繰越金	9,110	373	旧任意団体富士山クラブより寄付	7,700	125	1999年度より繰越
収入合計	24,422			61,550		
支出	決算額	比率	備考	予算額	比率	備考
ネットワーク事業	93	4		4,000	65	付表A1～5
基金運営事業	93	4		600	10	付表B
政策提言事業	93	4		100	2	付表C1～5
環境保全実践事業	5,420	222	富士山ツアー、森づくりツアー	6,000	97	付表D1～7
啓蒙事業	2,939	120	シンポジウム(3回)	7,300	119	付表E1～5
情報事業	2,196	90	ホームページの開設	5,000	81	付表F1、2
人件費	2,006	82	事務局員3名	26,370	428	
賃借料	881	36	静岡・東京事務所	1,971	32	静岡・山梨・東京
光熱水費	63	3		480	8	
旅費	804	33		1,700	28	
通信費	558	23		840	14	
事務費	825	34		1,140	19	
印刷費	53	2		500	8	
会議費	188	8		710	12	
雑費	156	6		112	2	
原価償却費	354	14		0	0	
次期繰越	7,700	315		4,727	77	
支出合計	24,422			61,550		

特定非営利活動法人富士山クラブ・平成12年度通常総会抜粋資料から作成

利活動法人の法人格を取得し、その翌月には毎日新聞社の創刊130周年事業とも連携した。新聞社側では、富士山をシンボル・マークとする自然保護団体との連携は、企業イメージを向上させ、全国キャンペーンに最適だと判断したのである。賛同する企業からの広告も期待した。

その宣伝効果によって、会員数は2000年には急増する(図4)。法人化時から2000年3月にかけて会員数が横ばいなのは、新年度を待って新入会員を登録したからである。年会費は個人会員が1口2000円以上、団体会員が1口20000円以上である。会員が都道府県別人口比(図5)で多い地域は、富士山近辺や可視範囲は予想できるとして、

さらに東西方向にも広がり、北海道と福岡県に飛び地がある。

しかし会費収入は、表3の財務状況が示すように、2000年度予算で総収入6千万円余の約7%を占めるにすぎない。収入の半分は各種の助成金で、その次が人材育成・環境教育などの事業収入である。支出の37%は、付表に示すような多額の事業にあてられている。これだけの事業を展開するにはかなりの人件費がかかっており、もはや無報酬という意味でのボランティア団体ではない。

周囲の市民団体には、「富士山クラブ」が有名になり多額の資金を集めていることについて、批判もある。いわく、同団体が富士山を日本の象徴

と主張しながら自らの募金の種にしたことは、逆説的に私物化しているという見方である。

3. 3 文書類における象徴的記述

「富士山クラブ」の広報類と『毎日新聞』の記事から、富士山についての象徴的な記述を、それぞれ表4, 5に抜粋した。

表4中の「富士山クラブ」の文書F1は、富士山を単純に日本のシンボルとみなしている。寄稿文のF3は、活動のシンボルとして受容しているようにも読める。「大阪だって富士山の裾野」は世辞だろうから、象徴性を論じるほどの表現ではない。

初期のF2, F4から、富士山の現状が日本の環境問題を象徴しているという、価値の逆転が行われていることは重要である。F5やF7ではさらに「富士“惨”」と洒落てもいる。F6は講演記録らしいが、企業や行政に対する明確な批判が文書化した貴重な例であり、任意団体のころから抱いて

いる本音を読みとれる。

表5の『毎日新聞』の記事は、一見似てはいる。まず、M1の「各地が抱える環境問題に良い影響を与える」は、上述した「日本の環境問題の象徴」の受け売りだろう。M4も意図は似ている。「富士山クラブ」の主張は、M9の取材では「地球」にまでエスカレートしたらしい。

注意すべきは、最初のM1から「現代人が見失った誇るべき日本人の心」という言辞を抱き合わせていることである。この精神性は、M2, M3, M5と展開されていく。精神性を持ち出すと、そもそもが前述のように明治期の大衆意識操作に発しているために、途端に論理が破綻する。すでにM2の「日本人の心を踏みにじる」は論理が飛躍しており、「日本人の総意」は独断的で威圧的である。標語の「魂のルネサンス」も、和洋折衷の意味不明の表現である。M6, M7は情に流された文章で、国粹主義の喧伝文の見本になっている。M11の首相名との比較は、もはや失笑を誘う。

表4 富士山クラブ文書における象徴的な富士山の表現

No.	文書・日付	記事抜粋
F1	会員募集パンフレット	富士山は日本のシンボルであるにもかかわらず、それを取り巻く環境の実態は…
F2	富士山クラブ通信No. 1, 1999. 04	●なんといっても富士山は日本の象徴です。それは良い側面だけでなく、環境後進国である日本の姿をも象徴しています
F3	同上No. 3, 1999. 06	●素朴な気持ちを持ち寄って、「富士山」というシンボルをきっかけに集まり…私は大阪にいますが、大阪だって富士山の裾野なんだという気持ちで富士山クラブとは関わっていきたい
F4	同上No. 4, 1999. 09	●富士山の自然環境の問題と沖縄の海の問題の本質は同じところにある
F5	大阪シボジウム (2000年1月開催) 案内パンフレット	(シンポジウム題名) 富士“惨”を知っていますか? ~日本一の山に散らばる空き缶とトイレペーパーのお話~/日本のシンボルであるにも関わらず、痛み傷ついている富士山の厳しい環境の現実と向き合い…
F6	富士山クラブ通信No. 5, 2000. 03	(事務局次長記名) 信仰の山として畏れ敬われてきた富士山とは、全く質的に異なる「観光地」が雲の上に出現した…無尽蔵とも思えた富士山の豊富な地下水に依存し、これを浪費することになんの疑いも持たなかった地域住民や企業…バブルの遺産ともいえる富士山麓に点在するゴルフ場の乱立を容認し、富士山の広大な森林を木材を生産するための経済的側面でしか捉えてこなかった行政の姿勢… 今の富士山が抱える多くの問題は私たち日本人すべてにその責任が帰せられるべきです。私たちは国民の誇りであり人類共通の財産であるべき富士山の存在をいつのまにか見失い、そして多くの恵みを余りにも安易に消耗し尽くしてしまっただけです。
F7	同上No. 8, 2001. 01	(2000年11月西宮市で開催されたシンポジウム題名) 汚れた富士“惨”を救えるか? ~富士山クラブの挑戦・環境パイオトイアの設置~/富士山の環境問題は日本の環境問題を凝縮しているとも言われています。「環境の世紀」といわれる21世紀に富士山の環境を根本的に美しくし、世界遺産として次世代に引き継がれるのか、日本人の智恵と具体的な行動が試されています。

●は、著名人や会員による寄稿や談話だが、内容についての責任は発行者にあるとみなす。

表5 毎日新聞における象徴的な富士山の表現

No.	発行日	記事抜粋
M1	99.12.16	美しい富士山をよみがえらせることは、各地が抱える環境問題に良い影響を与えるのはもちろん、現代人が見失った誇るべき日本の心や文化の再生にもつながると思います。
M2	00.01.01	心のふるさと・富士山はいま、下界の街角と同じようにごみなどに汚染されつつある。美しい日本の心をなくした「平和ニッポン」の象徴のように…／富士山を汚すことは日本人の心を踏みにじることにつながっていないだろうか。／母なる山再生へ「富士山キャンペーン」／富士山は今や悪い意味でも日本社会の象徴となっているようだ。／●富士山の美しさを守りたいのは日本人の総意だと思います／ 日本人の心のふるさと・富士山が近代化と開発の波に傷つき、汚れています。富士山の美しい姿と環境を再生させる運動を通して、日本人が失っていった「日本人の心と自然」を取り戻そうという魂のルネサンスでもありません。
M3	00.01.13	「富士山だより」では、日本人の心の象徴である富士山をめぐる話題や富士山の今の姿をレポートします。
M4	00.01.23	●富士山は日本社会の象徴
M5	00.02.23	日本人のふるさと富士山の美しい姿、環境を再生させる運動は、日本人の心を取り戻す魂のルネサンスにもつながる。／●いま、富士山という日本のシンボルが汚れきっている
M6	00.02.24	●世界各国にはそれぞれ名山がある。しかし富士山ほど一国を代表し、国民の精神的遺産となった山はほかにないだろう…万葉の昔から、われわれ日本人はどれほど豊かな情操を富士によって養われてきたことだろう。／富士山は、その勇姿で魅するだけでなく、日本人の哲学や国民性にも大きな影響を与えている
M7	00.06.05	●古くから日本のふるさととして仰ぎ見られてきた富士山…時代は変わっても富士山は日本人の心に誠実に生き続けております。気高さ、郷愁、あこがれ、そして希望、誇り…富士山の再生は、日々の生活に追われる私たちがともすれば見失いがちな「日本の心」を呼び覚まし、継承すべき日本の文化、アイデンティティーの再発見にもつながると確信しております。
M8	00.07.08	日本の象徴、富士山が、世界遺産になれなかった理由の一つはごみでした。
M9	00.07.15	「富士山は『地球』がテーマの巨大テーマパーク」という富士山クラブの取り組みは、子供たちに環境問題について考える絶好の機会を与えているようだ。
M10	00.08.05	●富士山は日本人の心のシンボルだが…／●富士山は我々の行動を映し出す鏡です。
M11	00.08.10	富士山は日本の姿そのものだ。／自国の象徴にごみを無造作に捨てるような倫理観に欠けた国民がいるだろうか。／●首相の名前は知らなくても富士山は世界中が知っている。5～100歳まで幅広い年齢層に登る山は世界でも珍しい財産で、大切にすべきだ。
M12	00.08.20	日本人の心の古里・富士山を詩に詠んでみませんか…「日本生活詩の会」は富士山を詩にすることで、新しいミレニアムに豊かな自分史を築いてもらおうと創設した「富士文学賞」の作品を…

●は、著名人による寄稿や談話だが、内容についての責任は発行者にあるとみなす。

3. 4 富士清掃登山

玉井は、「富士山クラブ」が主催するバイオトイレ設置(付表D5)と、毎日新聞社主催で「富士山クラブ」と外資系保険会社が共催する富士清掃登山(同D1)に参加した。清掃登山は、2000年7月22日に東京駅、新宿駅または横浜駅を出発し、日帰りまたは1泊2日で開催された。約800人の参加者は、貸切りバスで青木ヶ原、山中湖、

河口湖のいずれかに向かい、まず30分間清掃活動を行った後、富士五湖文化センターで著名人のトーク・ショーを聴いた。行事内容は、前章の森林保全活動に比べて一般向けだった。

玉井は日帰り・河口湖コースを選び、バス内で未成年者を除く男性7名、女性13名に質問票調査を行った。年齢構成は、30～60歳代がそれぞれ2, 3, 12, 3名で、平均年齢は52歳である。環境保全活動の経験は7名が有していた。

3. 5 清掃登山参加者が描く富士山

被験者に「富士山は“日本の象徴”や“日本人の心のふるさと”だと思いか」を問うたところ、肯定した者は9割の18名にのぼった。

そこで、彼らが思う「富士山の範囲」を、主要事物の位置を記入した白地図上に描画してもらった。改めて富士山の範囲を問われると誰しも困惑するが、筆者らは図6に示した富士山の熔岩、泥流、扇状地の堆積範囲と考えておく。しかし、被験者にそのような地形・地質の知識を求めているわけではなく、幾何学的な傾向を見るのが質問の意図である。

回答者が描く範囲は、いくつかの型に分類できた(図7a~e)。富士山が円錐火山であることは周知の事柄なので、それを率直に描画すると図7aのように円形になる。図7bのような楕円もみられたが、円の変形と考えておく。これらの半径は小さく、標高の高い部分だけを富士山と認識したことを示している。

残りでは、何らかの意図的な凹凸が認められた。図7cは、円形に近いが図7aよりも不連続的に半径が大きくなり、北部では地質的にも妥当な富士五湖付近までを範囲とする。しかし、南東や東には凹部がある。これらは、山麓の開発が進んだ地域を避けたと思われるが、箱根火山の広がり意識した可能性も残る。図7dは、青木ヶ原、愛鷹山、

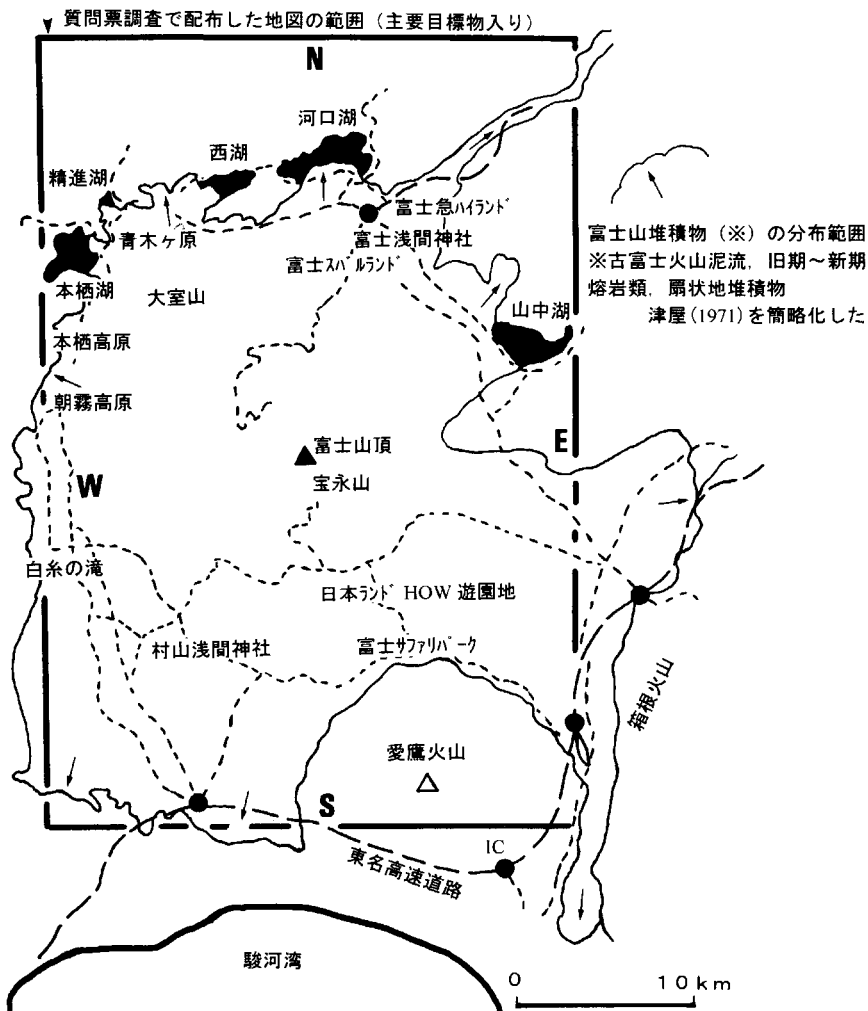


図6 富士山の堆積物の分布

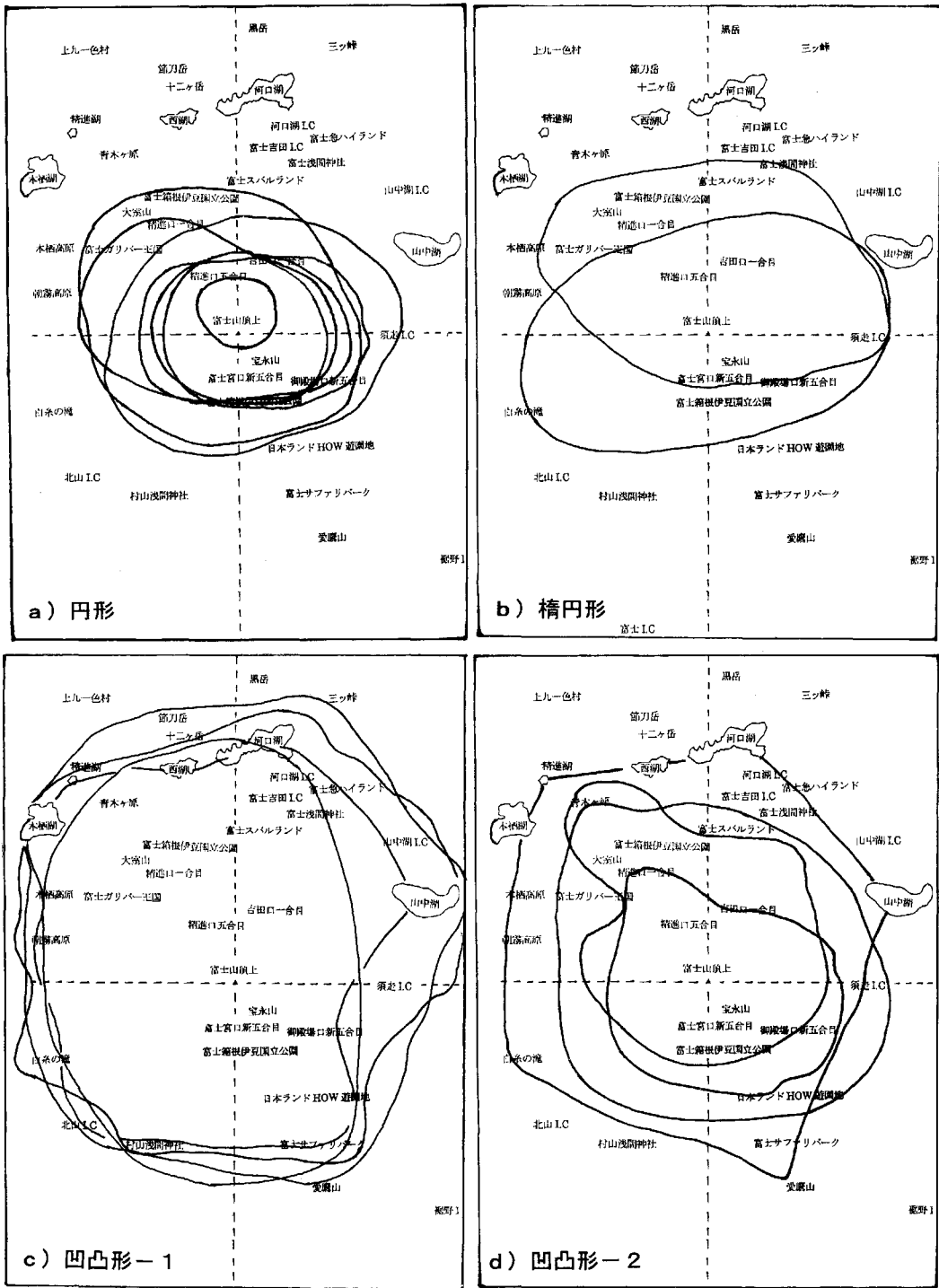


図7 富士清掃登山参加者が描く富士山の範囲
 質問票の白地図を基図としたが、座標軸は本稿のために記入した。

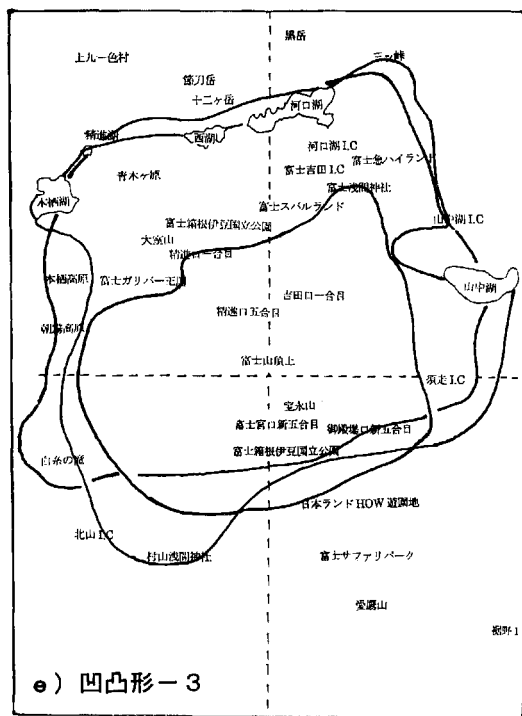


図7 (続き)

白糸の滝、精進口一合目などの事物に対して凸部を持つ。図7eでも三ツ峠、浅間神社、白糸の滝に凸部があるが、富士ガリバー王国、日本ランドHOW遊園地などを避けたらしい凹部がある。また、図7a～eを通じて、多くの回答で北・北西方向に広く描かれる傾向があった。

4. まとめ

森林保全運動の参加者の自然指向は、世論と同じ傾向を持つ。特徴といえば、目的を持って自然に関わり、登山への嗜好を持つことである。森林機能に対する評価では、水源涵養などの俗説が世論よりも強く支持された。一方、木材生産や自然教育など彼ら自身に関わっているものは、とくに支持されてはならず、運動推進者との間にズレがあった。

富士山の環境保全運動では、主催者の市民団体は富士山に環境破壊の象徴という新たな意味づけを行い、マス・メディアは前時代的な国粋主義への逆行を見せた。富士清掃登山の参加者は、ほとんどが富士山の象徴性を認め、その範囲について

は、未開発の部分や特徴的な事物に対して心理的偏倚を示した。

現代の環境保全運動は、これらに見られるような世俗性、矛盾、思いこみ、意味づけなどを雑多に含みながら、しかし現状を何とか改善しようという草の根の善意によって成立しているのである。

謝辞

山元、玉井の卒業論文調査では、各関係団体には大変お世話になり、行事参加者には快く質問に答えていただいた。厚く御礼申しあげる。

注

- 1) 「森づくりフォーラム」は、森林ボランティア保険(東京海上火災保険株式会社)の全国総括役も果たしている。この保険は、1996年4月に創設されたもので、傷害保険と賠償責任保険とを備え、活動日の参加者数に応じて事後報告・決裁すればよいという特徴がある。登録している団体数は、2000年現在で約280である。一般に市民団体の数を把握することは困難だが、この数は有力な目安になるので付記する。
- 2) 1996年11月実施。全国の20歳以上の者から層化2段階抽出を行って調査員が面接聴取し、有効回答数は3493。
- 3) 1999年7月実施。同上の方法により、有効回答数は2137。
- 4) 上掲2)に同じ。
- 5) 1996年11月現在の構成団体は、(山梨県所在)甲州昆虫同好会、蓮池再生復活の会、富士五湖青年会議所、南都留ふるさと青年塾、(静岡県所在)静岡県自然保護協会、深良を拓く会、富士に学ぶ会、桃沢川から愛鷹山を考える会、十木会、三島ホテルの会、北上くらしのサロン、三島ゆうすい会、グラウンドワーク三島実行委員会(15団体で構成)、源平川を愛する会、桜川を愛する会、御殿場小山水かけ菜生産組合、さわやか会議、富士山ナショナルトラスト、富士愛鷹の自然を守る会、富士の水を考える会。
- 6) グラウンド・ワークとは、1980年代にサッチャー政権下のイギリスで始まった環境保全運動形態で、市民と企業の連携を行政が支援するものである。イギリスでは産業の後退によって国家財政が逼迫し、もはや環境保全を国が主体となって行えなくなったことを意味していた。三島市の事例については、渡辺(1992)を参照。

文献

- 足立原貫 (1998) : 教育の城は山に築こう 草刈り十字軍運動25年. 農林漁業金融公庫月報.
- 阿部一 (1992) : 近代日本の教科書における富士山の象徴性. 地理学評論, 65A, 238-249.
- 伊藤ゆう子 (2000) : 里山とその保全活動について. 1999年度卒業論文. 集められたデータは Sugitani (2000) に引用されている.
- 猪瀬直樹 (1992) : 『ミカドの肖像 (上) (下)』新潮文庫.
- 太田猛彦 (1996) : 森林と水と都市. 森林文化研究, 17, 17-29.
- 金子郁容 (1992) : 『ボランティア・もうひとつの情報社会』岩波書店.
- 経済企画庁 (2000) : 『国民生活白書・平成12年版』大蔵省印刷局.
- 真田勉 (1998) : 森林ボランティア・行政とのパートナーシップの形成に向けて. 林業技術, No. 670, 8-11.
- 四手井綱英 (1998) : 『もの与人間の文化史53・森林II』法政大学出版局.
- 品田悦一 (2001) : 『万葉集の発明』新曜社.
- 柴崎茂光 (1996) : 漁民による植林活動とその歴史的背景・気仙沼地方を事例として. 森林文化研究, 17, 69-79.
- 杉谷隆 (2001) : 半島. 千田稔・内田忠賢編『風景の辞典』古今書院.
- Sugitani, T. (2000) : Conservation movement of secondary forests in rural farming villages of Japan: its history, aspects and case studies. *Regional View*, 13, 1-14.
- 太宰治 (1957) : 『富嶽百景・走れメロス』岩波文庫.
- 玉城哲 (1979) : 『水の思想』論創社.
- 地球緑化センター (1999) : 『山と緑の協力隊ハンドブック』地球緑化センター.
- 地球緑化センター (2000) : 『楽しい森林づくり活動森林ボランティア入門』地球緑化センター.
- 津屋弘達 (1971) : 富士山の地形・地質. 『富士山』富士急行(株)・(財)堀内浩庵会.
- ドレグソン, A・井上有一編, 井上有一監訳 (2001) : 『ディーブ・エコロジー』昭和堂.
- フォレスト21連絡協議会 (2000) : 『フォレスト21〔さがみの森〕森林ボランティアによる新しい森づくへの挑戦』フォレスト21連絡協議会.
- 三橋規宏 (1997) : 『森とCO₂の経済学』PHP研究所.
- 米地文夫 (1996) : 山の名に地政学はなじまない・地名による侵略 : 『日本風景論』から『大地の子』まで. 季刊地理学, 48, 188-191.
- 林野庁 (2000) : 『林業白書・平成11年度版』日本林業協会.
- 渡辺豊博 (1992) : 三島市でのグラウンドワークの試み. 地域開発, No. 339.

すぎたに・たかし
お茶の水女子大学 助教授
sugitani@cc.ocha.ac.jp
やまもと・ちかこ, たまい・やすこ
2000年度卒業生

Difference in environmental awareness between conservationists, eco-tour attendants and the mass media

Takashi SUGITANI, Chikako YAMAMOTO and Yasuko TAMAI

Abstract: Two volunteer organizations assisting forestry and the Mt. Fuji Club were surveyed from a viewpoint of environmental awareness. Compared with the result of the national public opinion poll, occasional attendants to their forest management works did not possess specified knowledge on the nature or the purpose of the movement, but stronger affection for recreation in the mountainous forests (Figures 1-3). In the conservation movement of Mt. Fuji, Japan's highest volcano assumed as the imperial symbol by the Meiji Government, the Club's promoters newly symbolized Fuji as the environmental deterioration caused by industry and tourism (Table 4), whereas the *Mainichi Shinbun* tried to arouse patriotism as well (Table 5). The eco-tourists, who gathered to remove garbage, approved of Fuji's symbolism and drew its body excluding the developed areas at the foot (Figures 7a-e).

Key words: environmental awareness, volunteer, nature conservation

付表：特定非営利活動法人富士山クラブ・2000年度事業計画

-
- A1) 富士山環境ボランティアネットワーク会議の設立
A2) 第1回富士山環境保全支援プラン（下記10件、計155万円）
山梨県富士山五合目周辺自然解説友の会、三島ゆうすい会、甲州ツキノワグマ研究会、
ふじ環境倶楽部、加藤学園高校化学部、水中環境研究センター、高山植物保護協会静
岡県支部、三ツ峠の草原植物を愛する会、日本野鳥の会富士山麓支部、半場良一
- A3) 全国おらが富士ネットワーク会議の結成
A4) 静岡県・山梨県との連携強化、富士山大好き100人会議の結成、
企業、官公庁、富士宮浅間大社などへの活動説明と支援要請
A5) HPを通しての海外への情報発信、アメリカ支部開設検討（日本人会との連携等）、
世界遺産（複合遺産）登録への研究、
富士山サミット（世界各地の12の円錐火山との連携）開催の検討
- B) 富士山水と緑の育水基金・企業協賛タイプ募金箱の検討、設置
- C1) 富士山に関する資料収集管理
C2) 富士山学会の設立
C3) 富士山環境資源活用プラン政策提言書の策定
C4) 富士山情報誌の検討
C5) 成果物の発行
- D1) 清掃登山、ゴミシンボジウム、全国おらが富士一斉クリーンキャンペーンの開催、
青木ヶ原ゴミ不法投棄・自殺未然防止パトロール隊の検討
D2) 富士山クラブ会員による森づくり作業の実施【国土緑化推進機構助成金】、
富士山千年の森づくり事業（自然林化）の推進準備
D3) 森林塾の開校準備（山梨県道志村）、
森林の整備活動支援事業の実施【国土緑化推進機構助成金】
D4) 森づくりインストラクター養成講座の募集及び開講、受講者による団体の結成
D5) 環境バイオトイレ設置、水溶性ティッシュの配布
D6) 青木ヶ原イメージアップキャンペーン（エコツアー、食のイベント）推進
D7) 新富士講ツアーの検討、富士山古道復元プログラムの策定
- E1) 富士山エコツアーの実施
E2) 富士山クラブ地球学校の開校
富士樹海長期滞在事業実施【文部省子供長期滞在自然体験村事業助成金】
E3) 富士山クリーンコンサートの開催
E4) 富士山シンボジウム、セミナー、写真展の開催
E5) 「富士山の日」制定活動の展開（2月23日）
- F1) 会員向け機関紙誌（年2回）・富士山クラブ通信（年6回）
F2) 各国語HPによる情報の世界発信、HPを通じた企業キャンペーンの仕組みづくり、
バーチャル・エコツアー、自然、山頂気象、観光情報の発信
- その他・会員拡大事業）
毎日新聞創刊130年記念「富士山再生キャンペーン」との事業協賛
様々な場所、機会においての富士山クラブPRキャンペーンの展開
-

平成12年度通常総会抜粋資料および「富士山クラブ通信」No.6から作成